



「鉄と鋼」と私

「鉄と鋼」と日本語と私

“Tetsu-to-Hagané”, Japanese and I

杉浦夏子

Natsuko Sugiura

新日鉄住金 (株) 技術開発本部
鉄鋼研究所 基盤メタラジー研究部
主幹研究員

“鉄と鋼”第100巻発刊おめでとうございます。私は鉄鋼メーカーの社員であり日頃から鉄と鋼には大変お世話になっている一人ですが、この度御縁があって一文を寄せさせて頂く機会を頂きました。

さて、一言で100巻 (= 100周年) と言いますが、創刊時は年号で言えば大正4年、第一次世界大戦の最中と、すでに歴史の教科書に載るような時代からのことです。以来、1996年に会報誌であるふえらむが創刊されるまで、“鉄と鋼”は80年にわたり和文論文誌と会報誌の両方の役割を備えてきたわけですが、また、2008年 (平成20年) からは皆様よくご存じの通り、ふえらむとの合本化が行われて現在の姿になっておりますので、ある意味一冊の雑誌のようにとらえている方も多いことと思います。そこで、本稿では論文誌と会報誌の両方の側面から“鉄と鋼”という雑誌に対して私なりに感じたところを書かせていただきたいと思います。

そもそも、鉄 (Fe) というたった一つの元素をベースに、かくも脈々と研究が続けられ、積み上げられた成果が現在の日本の鉄鋼業を支える技術となっているという事実にはまず率直に感動します。また、個人的には“鉄と鋼”というストレートな誌名も大変カッコよくて気に入っています。知らない方に、“次の大河ドラマのタイトルです”と言えば“そうかも?”と思われそうな気すらします。このような感覚を持つのは“鉄”と“鋼”という素材が私達日本人の暮らしや歴史に密接に関わってきた事にも所以するのかもしれませんが。実際、創刊当時の“鉄と鋼”にはどんな記事や論文が掲載されていたのか、CiNiiで検索してみると、例えば創刊年である1915年には、野田鶴雄氏の“列強の製鉄事業”という記事¹⁾が掲載されています。少し長くなりますが書き出しを抜き出してみると、“題して列強の製鉄事業と云ふも、今次戦乱突発後に於ける其の現状は、英国の如き自国を戦場とせざるもの、他は容易に之を知る能はざる故に、茲には平和時代に於ける世界の産額、之か原料の需要、近代製鋼術の進歩、欧

州諸国に於ける製鐵地の分布等に関する状況を記述し、如何に之等の製鉄事業が戦乱の爲めに影響を蒙りつゝあるかは、交戦地帯の推移、海上運輸の能否、技術者職工の減少等によりて随時に変化すべく、読者自ら之を判断する亦興味なきに非ざるへし… (旧漢字は新漢字に変換しています)”と、やはり第一次世界大戦の時代を舞台に、日本の製鉄業に携わる人々の大河ドラマがスタートしそうな感じがします。(ちなみにこの記事によると当時 (大正2年) の銑鉄の産出量順位は合衆国>独逸>英吉利>仏蘭西>白耳義>奥匈國>加奈太>瑞典だそうです。)

もちろん、このような鉄鋼産業に関わる情報以外にも“X光線の金属に於ける応用”のような技術論文²⁾も掲載されています。この論文の書き出しは“各種工業に使用する金属材料の種類は、月を追ひ日を経るに従て増加し、又之れが試験方法のごときも化学分析、機械的或は物理的試験及び組織試験等ありて、是又近年長足の進歩をなしつゝあり、是に於てX光線を以て金属内部の疵を見出すも、亦興味ある試験の一たるを失はざるへし。”とあります。X線での内部欠陥観察に関する論文ですが、科学論文でありながら文体に何か風情を感じ、100年という時の流れによって言葉はこれほどまでに変化するのかと改めて感じます。つまり、100年を経た“鉄と鋼”にはかなり歴史的な資料としての価値があることがわかります。私達は、現在の読者の興味のある情報、技術を今最もわかりやすい言葉で伝えようと努めていますが、100年後の未来の鉄鋼技術者は、“鉄と鋼”創刊200周年記念特集号で、やはり200年前の創刊時の記事を読み、そして100年前に書かれた我々の世代の論文や技術記事を読み、今の私達が意識していない時代の空気のようなものを感じてくれるのかと思うと楽しみでもあり、少しドラマチックな書き出しにしようかと気負った気分にもなります。こんなお楽しみは“鉄と鋼”が長きにわたり継続して発行され続けてきたからこその大特典であり、創刊当時から今に至るまで途絶える事なく

“鉄と鋼”の発行に尽力されてきた皆様の努力には心より敬服いたします。

一方、グローバル化が進み、英語での情報発信の重要性が増している現在、和文論文誌の存在意義については議論が分かれるところかと思えます。しかし、私は我々が日常生活で用いる言語が日本語である限り、和文論文誌は大きな存在意義を持ち続けると思っています。もちろん、英語が苦手でも何か文献を探したいときはまずは和文誌を検索して参考文献として挙がっている英文誌を手取るのが常である私のような者にとって、和文誌は欠くことの出来ないありがたい存在です。しかし、それと同様に、日本語で論文を執筆するということにも大きな意義を感じています。

先日、日本金属学会の会報誌まてりあに寄稿されていた千葉工業大学名誉教授の雀部実先生の“ユビキタス同時通訳機待望論”³⁾の中に、科学技術を伝える言葉に関する興味深い新聞記事がいくつか紹介されていました。その中で物理系の討論会で「科学の土台となる考え方を議論するときには慣れた言語で議論を深めた後、英語で発信する科学があってもよい」という趣旨の発言があった事が紹介されています⁴⁾。我々の場合、この慣れた言語は日本語が相当する訳ですが、日本語で議論することで議論の質を深める事はもちろんですが、日本語で科学技術論文を書くという作業の重要性を私自身強く感じています。特に、若い研究者、技術者の方には是非和文誌への投稿をお勧めしたいと思います。論文執筆前には当然関係する専門の方々と議論を尽くし、構想が固まってから執筆作業に入る事と思います。しかし、実際に、投稿論文として世に出る事を意識しながら構成を考え、使い慣れた日本語で正確に事実を伝える作業を行うときには、一つのデータに対してもこれは実験から導かれる唯一の結果なのか、あやふやな部分をいくらか含む結果なのか、その事を正しく伝えるためにはどの日本語を選ぶべきかという推敲が繰り返される事と思います。その過程はもちろん論文としての質を高めてくれますが、実験事実としてのデータの中に含まれる意味をより深く理解することにつながりますし、時に自分の研究に対する新たな疑問や課題の発見につながります。当然、自分が最も慣れた言語を駆使し頭を悩まし質を高めて書きあげた和論文は必ずやもっと多くの人の目に触れて欲しいと思うに違いありませんので、その時は是非ISIJ Internationalに再投稿して広く世界に情報発信して頂くこともお忘れなく。

ところで筆者は名前からお分かりの通り、女性です。で、いつ頃から“鉄と鋼”で女性の投稿が始まったのかというところは少し興味があり調べてみました。ただ、残念ながらというか当面ですが性別で検索が出来る訳もなく、お名前の最後に子が付く方を検索したにとどまります。そうすると1960年代にちらほらと女性のお名前が…結構女性の歴史もあるのだとPDFを開いてみると、会員のご夫人を対象とした見学会の感想を寄稿されたものが掲載されていました。製鉄所見学に陶芸体験…優雅です。今なら夏休みにでも会員のお子様を対象とした体験ツアーなど企画していただけると男女会員共に喜ばれるのではないかしら…などと脱線しつつ更に調べると1970年代から須藤恵美子氏などを中心にちらほらと女性らしき名前が挙がるようになり、1980年代からは製鉄メーカーにも徐々に女性が増えていったようです。ただ、それ以降も、女性の会員数は増加していると思いますが、少数派にとどまっているのは事実です。これから女性会員がますます増え、“鉄と鋼”に活発に投稿して大いに存在をアピールして下さる事を期待していますし、女性会員のサポートに繋がる情報の提供等もこれから学協会誌に求められる役割の一つだと考えています。また、男女問わず若い会員の皆さんが自分の成果を積極的に投稿したくなる仕組み、紙面作りも更に工夫して行く事が求められているように思います。

これからも“鉄と鋼”は鉄鋼材料と日本語が使われる限り、時代と共に少しずつ形を変えながら、号を重ねていく事と思います。継続していくということは本当に力があることですが、“鉄”と“鋼”という素材、そして“日本語”にはそれに値する尽きぬ魅力があると私は思っています。

200巻発刊記念号を読んだ女性技術者が“今は鉄鋼といえど女性だけだなぁ？”と首をかしげているかどうかは100年後のお楽しみ。

参考文献

- 1) 野田鶴雄：鉄と鋼, 1 (1915) , 17.
- 2) 戸波親平：鉄と鋼, 1 (1915) , 1119.
- 3) 雀部実：まてりあ, 52 (2013) , 379.
- 4) 尾関章：朝日新聞2012年4月28日夕刊3版2面

(2013年9月9日受付)